



卒

業



和乃

璃瑚

綾乃は信じていた。

名前とは裏腹に、ごく普通の家庭に育ち、顔も頭もそれなりにという綾乃は、まさに平均的な女の子だ。しかし、彼女のさっぱりした性格のせい、彼女の周りにはいつも誰かがいた。性格さえよければ必ず人には好かれるものだという、典型的な見本である。

「よく男の人は女を顔で選ぶって言うけど、違うわ、女は中身よ」

あの時まで、綾乃は信じて疑わなかった。

そう、あの事件が起こるまでは。



上天気の日曜日、広場はいつもより多くの人でごった返していた。それでも綾乃はすぐに哲也を見つけることができた。

「ごめん、待った？」

「いや、オレも今来たところ」

綾乃と哲也は付き合って2年ちょっとになる。週に1度のデートは必ずこの広場の時計台の前で待ち合わせる。もう何回も繰り返されてきた光景である。

哲也は、綾乃が高校3年間想い続け、卒業間近になって、やっとのことで想いを打ち明けた人である。そして、綾乃の『女は中身』という信念を裏付けてくれた人でもある。

背が高くてカッコよくてスポーツ万能で、それでいて気取らないという、文句のつけようのない彼には、当然学校中の女の子が憧れていた。しかもどれだけ女の子にもてても、男の子の友達が減らないところが綾乃は好きだった。だが、どう考えても美人でもなくスタイルがいいわけでもない自分には、勝ち目はないと諦めていた。だからと言って、哲也への気持ちを諦められるわけでもなく、綾乃は3年間も密かに想い続けたのだ。

綾乃が哲也に告白したのは、仲のよかった友達に半ば強引にセッティングされたからだったが、結果的にはそれが今の自分たちの関係を作ることになった。

「今日はどこ行こっか」

「そうだな、天気もいいし、公園でも行ってのんびりしようか」

こんな会話でいつものデートは始まる。行き先を希望すれば連れていってくれるし、希望しなければ哲也が決めてくれる。綾乃には、そんな2人の関係がちょうど心地よかった。

考えることは皆同じらしく、公園は広場以上に混雑していた。2人して空いているベンチを探していると、哲也の目がふと1点に止まった。

「どうしたの？」

「え？ あ、いや、なんでもないよ」

そう言いながらも、哲也はさっき見ていた方向をちらちら見ている。

——あの人？ もしかしたら哲也、あの綺麗な女の人を見てるのかな。まったく、美人がいるとすぐこれだから。

綾乃は、美人に対する哲也の反応に慣れているので、別になんとも思わない。ふざけて美人に

見とれるフリをしても、哲也が好きなのは自分だという自信があったからだ。

すると、レジャーシートを広げているグループの、その女の人も哲也のほうを見た。

「あ、綾乃、あっちのほう探してみようよ。あっちならありそうだし」

哲也の様子がおかしい。なんだかうろたえているような感じがする。これは綾乃にとって、とても気に掛かることだった。

——いつもの哲也だったら、とびっきりの美人を見たって、「いいよな～、美人は」なんて、冗談めかして言うだけなのに……

綾乃は嫌な予感がした。哲也は何も話さない。ベンチを見つけて座っても、何も話さない。ただ、難しい顔で何かを一生懸命考えている。耐えられないほどの重苦しい空気の中、綾乃はただ黙ってそのときが来るのを待っていた。

どれくらいそうしていたのか、目の前で遊んでいた子供たちもいなくなった頃、やっと哲也が重い口を開いた。

「別れてくれないか」

「え？ ちょっと待ってよ。そんな突然……」

綾乃は戸惑ってしまった。まさかこんなことになるとは思ってもしなかったのだ。綾乃はただ単に、哲也があの人と浮気でもしたのだろう、そしてそれをどう打ち明けるかを考えているのだろうと思っていたのだ。綾乃の頭の中は、まさにパニック状態だった。

「もしかして、さっきの美人？ あの人が何か関係してるの？ どうしてそんなこと、突然言い出したの？ いつから思ってたのよ？」

綾乃は矢継ぎ早に質問する。哲也のことを考えている余裕はない。哲也はひと言ひと言考えながら答える。

「オレがいつも昼飯食ってる店あるだろ。あそこに2ヶ月くらい前からあいつが来るようになったんだ。オレ、ひと目であいつのこと好きになっちゃったんだよ」

哲也は彼女と初めてデートした1ヶ月前からずっとどうするか考えていたと言う。哲也が彼女を『あいつ』と呼ぶことに、綾乃はさらにショックを受けた。綾乃は興奮を抑えきれずに問い詰める。

「じゃあ哲也、あたしと会ってるときもあの人のこと考えてたの？ 2年も付き合ったあたしよりも、あの人なの？」

「ごめん。オレ、今はあいつのことしか考えられない」

愕然。綾乃にはそれしかなかった。哲也がそんなことを考えていたなんて、思いもしなかった。それでも泣いてすがりつくなんてこと、綾乃にはできない。哲也に頭を下げられたら、結局認めるしかないのだ。悔し紛れに軽い調子で言う。みる。

「分かった。これまでだね。今までどうも」

綾乃は歩き出した。後ろも見ずにただひたすらに。

——絶対に泣かない。こんないい天気なのに泣いてたまるもんか。

綾乃は歩き続けた。

「ねえ、そう思わない？」

女子大生にとって、食堂は授業をさぼっておしゃべりする為にあるようなものだ。あちこちで他愛もない話に花が咲き、授業では見られないような生き生きした顔の学生たちが、コーヒーカップを手にして行き交っている。もちろん綾乃と里美も例外ではない。

「え、何が？」

「だから、女は結局顔なのよ。そう思わない？」

「そうかなあ」

綾乃がコーヒーカップをいじりながら話を始めるときは、必ずこの話が出ることを里美は知っている。毎日繰り返されている会話だ。別れてからまだ1週間しかたっていない綾乃は、哲也の心が変わったことよりも、性格美人より顔美人を哲也が選んだことにショックを受けているのだ。里美にはそれが痛いほどよく分かった。

「そうよ。だって1ヶ月だよ、哲也があの人とデートしてから。そんなくらいで何が分かるの？」

何も分からないじゃない。なのに2年付き合ったあたしよりあの人を選んだってことは、結局顔のいいほうをとったのよ。ひと目惚れだったみたいだし」

「う〜ん。でもお昼食べながら色々しゃべったのかもよ」

綾乃が反論するのは分かっているが、一応フォローしてみる。

「だとしてもさ、たった2ヶ月で中身まで分かるわけないもん」

案の定である。里美には、ただ話を聞くしかできない。フォローすれば反論するし、かと言って哲也のことをひどい奴だと批判でもしようものなら、

「哲也のこと、悪く言わないで。哲也だって色々悩んだと思うの」

と、こうだ。正直ムツとする時もあるが、綾乃が落ち着くまではしょうがないと里美は諦めていた。

「里美はどうして彼氏作らないの？」

綾乃が唐突に聞く。男の子にも女の子にもかわいいと評判で、性格だって2重マルの里美が、どうしていつまでもひとりなのかが、綾乃には分からなかった。過去に何かとんでもなく辛い経験をしたのかと思い、今まで聞くことはためらっていたのだが、里美はあっさりとした。答えた。

「作らないんじゃないくて、できないだけ」

「それだけかわいくて？ 里美がその気になれば、いくらでもいるじゃない」

それは事実だった。里美に言い寄る男の子はたくさんいる。それなのになぜか、里美はいつも断ってしまう。だから、里美には男の子の友達が多いが、特定の、いわゆる彼氏というものがいないのだ。里美がどんな人間かを知らない人たちの中には「いい気になっている」とか「男を手玉にとっている」とか陰口をたたく子もいた。そんな時、綾乃はいつも腹を立てるが、里美は怒るでもなく悲しむでもなく、堂々と、そしてあっけらかんとしていた。そんな里美は、綾乃にとって憧れであり、目標でもあり、大好きな親友だった。

「私が求める条件の人がいないのよ」

「里美、理想が高すぎるんじゃないの？」

「違うよ。私はただ、友達を認めて欲しいだけ」

「友達を認めるって？」

綾乃はカップをいじるのをやめて聞き返した。

「私、女の子だけじゃなく、男の子の友達も多いでしょ？ それを認めて欲しいの。やっぱ彼氏となると、いくら友達っていても男の子が一緒だと、いいようには思わないじゃない？」

「でもだめだとは言わないんじゃないの？」

「それでも心の中にわだかまりとか不満は残るでしょ？ そしたら何かの時にバクハツするよ、きっと」

「そっか。それはそうかもね」

「寂しいと思う時もあるよ、確かに。でも友達と会えなくなるくらいなら、いないほうがマシなの。今はまだ、友達よりこの人って思える人に出会ってないんだと思う」

「彼氏よりたくさんの友達か」

綾乃はふ〜んとうなずいて言った。

チャイムが鳴った。午前中の授業を終えた学生たちが、一気に食堂になだれこんでくる。とたんに戦場と化した食堂では、大きな声で話さなければならず、とてもじゃないがゆっくり話なんてできない。2人はパンを買って中庭に出た。

今日は天気がよく風もないので、中庭にはお弁当を広げるグループもあった。そこでもにぎやかにおしゃべりしていたが、食堂よりはずっとマシだった。2人は中庭の隅に置かれたベンチに陣取り、ランチすることにした。

「綾乃さ、男の子と会ってみる気ない？」

パンの袋を開けながら、突然里美が聞いた。

「男の子って、つまり紹介ってこと？ あたし今そんな気分じゃないな」

よく「失恋を癒すのは新しい恋だ」と言うけれど、今の綾乃には他の人に目を向けるなんてことはできなかったし、したくもなかった。

「紹介ってのじゃなくてさ。よく話してる貴志っているじゃない？ あの子が会いたって言うてるのよ」

「どうして貴志くんが？ 里美、何か余計なこと言ったんじゃないでしょうね」

綾乃は軽く里美をにらんでみせた。すると、里美は顔の前で手を振りながら言った。

「言ってない、言ってない。たまたまこの前皆で撮った写真を見てて、貴志が『この子、なんかかわいい。性格よさそう』って言うのよ」

「そんなこと言われたって……」

中身より顔だということを、哲也にいやというほど思い知らされた綾乃は、里美や貴志の言葉をすぐに受け入れることはできない。それは里美にもよく分かっていた。しかし貴志がとことん中身を重視する人間だということを知っている里美は、なんとか綾乃に貴志と会ってほしかった。貴志と話せば、綾乃はきっと立ち直れる。里美はそう信じていた。

「いいじゃない。ほんとに紹介じゃないし。ちょっと会って話すだけだから。ね？ お願い」  
里美に手を合わせられると、綾乃もそう簡単に断るわけにもいかない。まあちょっと会うだけならいいかと思ひ直し、

「しょうがないな。ほんとにちょっと会うだけだよ」と答えると

「やった！ ありがとう、綾乃」

子供のように手をたたいて喜ぶ里美に、綾乃は思わず吹き出してしまった。



今日は貴志と会う日だ。綾乃は出かける準備をしながら、初めて貴志と会った時のことを考えていた。あのときから、もう1ヶ月がたとうとしている。

「今日は来てくれてありがとう」

貴志はまず初めにそう言った。

——里美と同じだ。

本当は綾乃のことを考えてしていることだ。それならば、『してやった』と思われてもいいところなのに、2人は逆に『ありがとう』と言ってくれる。これが類は友を呼ぶというやつなのだろうか。綾乃はそんなことを考えていた。貴志は確かにいい男だった。外見もそして内面も。里美から哲也のことは聞いているはずなのに、まったく知らないフリをしてくれている。しかもそれがわざとらしくなかったのも、綾乃は哲也とのことが本当にあったのだろうかと思うくらいだった。まるで昔からの友達のように、2人は笑い、しゃべり、楽しんでいた。

「綾乃ちゃんがすごくいい子だって、前から里美には聞いてたのに、写真って見たことなかったんだ。それがこの前あいつのアルバム見てて、『この子いい』って言ったら綾乃ちゃんだって言うから、びっくりしたよ」

「あたしも、考えてみたら写真は見たことなかったんだよね。話はよく聞いてたから、会ったときえあるような気になってたんだけど」

「え、話してもしかして、オレが半分寝ながら原チャ乗っててどぶに突っ込んだ話？」

「そんなことしたの？」

「あ、じゃああれ？ ペットショップで犬に餌をやろうとして、間違っってウンコつかんだ話？」

「げ～、サイアク！」

「あれ、違った？ じゃあ大学生にもなって迷子の呼び出しされた話？ それともオカマの真似してたら本物のオカマに怒鳴られたやつかな、それとも……」

綾乃は笑ってしまった。それにつられて貴志も笑い、2人は涙が出るほど笑い転げた。周囲の人たちは不思議そうに見ていたが、2人は気にならなかった。

――もしかしたら心の底から笑ったのは、哲也と別れて以来かもしれない。

綾乃はとても幸せな気分だった。

1日はあっという間に過ぎ、空が朱く染まる頃、二人は駅への道をのんびり歩いた。

「今日はほんとに楽しかった。ありがとう」

帰り際にそう言った綾乃に、貴志は優しく笑って答えた。

「オレも。よかったらまた会おうよ」

それから2人は頻繁に会うようになり、毎日のように夜の長電話をするようになった。

あれから1ヶ月。今日はちょうど1ヶ月目の日だ。綾乃は、初めて貴志と会った日と同じ服を着ることにした。クローゼットから服を取り出し、鏡の前で胸にあててみる。「うん、かわいい」と自分を誉めながら、ふと鏡の中の自分に問いかけてみた。

――どうしてこんなことするんだろう。まるで記念日みたいに……。バカみたい。

綾乃は自分の心の揺れに気付いてはいたが、まだ怖い気持ちのほうが大きかった。新しい恋に踏み出す勇気がなかった。

「今のまま。このまま貴志くんと続いていけばいい。そのうちもしほんとに好きになったら、その時はその時よ。今はまだこのままでいい」

綾乃はそうつぶやいて、支度に取り掛かった。

貴志は水曜日でも大学が休みだった。今日は綾乃も休講があったので、2人は海の見える大きな遊園地に行くことにしていた。

まるで貸切のように空いている遊園地で、2人は子供に返って楽しみ、はしゃいだ。

絶叫マシンが大好きな綾乃は、お気に入りの絶叫マシンに何回も乗りたがり、初めは付き合っていた貴志もだんだん気分が悪くなり、とうとう子供を見守る父親のように、外で眺めるだけになってしまった。お化け屋敷では、怖がりの綾乃が貴志に引きずられるようにして目をつぶって歩き、あちこちでつまづいたりもした。2人で食べたソフトクリームはやたらと柔らかく、落ちないように食べるのに精一杯で2人して無言になっていることに気付いて大笑いもした。

「遊園地って平日だったらこんなに空いてるんだな」

「ほんと。休みの日なんて、並ばないと乗れないのにね」

「今日はラッキーだったよな。天気もよかったし、晩飯もうまかったし」

「うん。思いっきりエンジョイしたって感じだよな」

2人が遊園地を出た頃、街はすっかり日が暮れて、会社帰りのサラリーマンたちが疲れ切った顔で歩いていく。

綾乃が楽しかった1日の余韻にひとりながら歩いていると、

「綾乃ちゃん、そろそろいいかな」

と、貴志がやんわりと言い出した。

「何が？」

「オレとちゃんと付き合っしてほしいんだ」



「どうしたの？ うかない顔して。何かあったの？」

里美が食堂に入っていくと、綾乃がえらく考え込んでいた。

綾乃の手にしたホットコーヒーはもうすでに冷めてしまっている。自分のコーヒーと、綾乃のために新しいコーヒーを買って、里美は綾乃の前に座った。

「実はね……」

「オレとちゃんと付き合っほしいんだ」

貴志の突然の申し出に、綾乃は言葉を失ってしまった。

「この1ヶ月、綾乃ちゃんのこと、頭から離れないんだ。オレじゃ……、ダメかな？」  
——ダメなわけじゃない。貴志くんはいい人すぎるくらいの人だもん。でもあたし……。やっぱり怖い。

「綾乃ちゃん？」

「知ってるでしょ？ 前の彼とのこと。あたし、彼に裏切られた。あたしは美人じゃないからせめて性格美人になろうと生きてきて、哲也と出会って、今まで自分のしてきたことが間違いじゃなかったって思えたの。でも彼は、性格より顔を選んだ。信じてたのに……」

「里美から聞いた。でもオレは違う。俺は人間は中身だと……」

「いい加減なこと言わないで！ 結局は顔なのよ！ もしここにすごい美人がいたら、貴志くんだってそっちを取るのよ！ どうせ皆そうなのよ！」

気が動転していた綾乃は、思ってもいないことまで言ってしまった。

綾乃には貴志がどれだけいい人か、どれだけ中身を重視してくれる人かがよく分かっていた。それでも綾乃は不安だった。

「ごめん。ひどいこと言って」

綾乃は深呼吸して言った。

「でも今のあたしには、顔より性格なんて言葉、信じられないの。貴志くんはいい人だと思う。裏切ったりするような人じゃないと思う。でも……それでも100%は信じられないの。信じるのが怖い」

綾乃はそれだけ言うと、逃げるように走って行ってしまった。

それ以上貴志の顔を見ていると、涙が出そうだった。貴志に申し訳なくて、いつまでも立ち直りきれない自分が情けなくて、どうしたらいいのか分からなくなっていた。

「そうだったの。それで分かったわ」

里美は頷いた。

「分かったって、何が？」

ゆうべ1人で散々泣いたのか、赤く腫らした目を里美に向け、綾乃は聞いた。

「貴志がね、昨日電話してきて、『綾乃ちゃんに謝っておいてほしい』って言うの。『無神経だった』って。理由を聞いても何も言わないから意味が分からなかったんだけどね」

「あたしが悪いのに……。貴志くん、どうしてそんなに優しいんだろう」

「そんなの決まってるじゃない。綾乃のことが好きだからよ。私なんて優しくされたことないよ」

里美は綾乃におどけてみせたが、綾乃はすっかり自己嫌悪に陥っている。

「貴志さ、綾乃が悪いなんて、ぜんっぜん思っていないと思うよ。気にすることないって」

励まして、綾乃は下を向いて、今にも泣き出しそう。

里美は決心した。今まで綾乃の気持ちを考えて言わないでいたことを、はっきり言ってしまおうと。

「綾乃」

呼びかけられて顔を上げた綾乃は、いつもと違う表情の里美を見た。

「性格美人より顔美人を選ぶのは、そんなに悪いことかな？」

「え？」

今まで自分が言ってきたことと逆のことを言われて、綾乃は戸惑った。なんだか自分を否定されたような気になって、つきつい口調で言ってしまった。

「どうしてそんなこと言うのよ！ 里美はあたしの味方だったんじゃないの？ 哲也のほうが正しかったって言うの？」

すると里美は、しっかりと綾乃の目を見て答えた。

「もちろん私は綾乃の味方よ。いつでも、これからもずっと。だから今まで、綾乃が哲也くんを責めるのを何も言わずに聞いてきた。でもね、そろそろ考えてみてもいいんじゃないかと思ったの。性格美人を選ぶか顔美人を選ぶかは、それぞれの好みじゃないの？ ううん、性格や顔だけでなく、好みは人それぞれよね。何が正しいなんて、そんな決まりはないよ。相手の人がたまたますごい美人だったから、性格か顔かって話になっちゃっただけで、要はリンゴよりミカンが好きになったってのと同じレベルなんじゃないのかな」

里美は言葉を選びながら、しかしはっきりと言う。

「顔美人を選んだ哲也くんを責める綾乃こそ、外見ばかり気にしてるんじゃないの？」

綾乃は何も言えなかった。いろんな思いが胸をよぎって混乱した綾乃は、やっとのことで

「ごめん、とりあえず今日は帰るわ」

と言って、席を立ってしまった。

食堂の入り口でそっと里美のほうを見ると、里美は少し泣いているようだった。何かいけないものを見たような気がして、綾乃は急いでその場を離れた。

授業もバイトも休んで帰宅した綾乃に、母は「具合でも悪いの？」と声を掛けたが、綾乃は何も答えず部屋に閉じこもった。

哲也とのことや、貴志とのことや、里美の言葉を思い出しながら、綾乃は何時間も考えた。――哲也に振られたのはほんとに悲しくて辛かった。でも相手が美人だったことが、その気持ちに拍車をかけたのも事実。今の気持ちは？　もしかしたら今の気持ちは、哲也への思いより、相手が美人だったことにこだわっているんじゃない？　だとしたら、里美の言う通り、あたしのほうが外見ばかり気にしているのかも……。ううん、違う。あたしは哲也に振られたことが悲しいだけ。相手が誰であっても。でも……。

綾乃の考えは2転3転し、考えれば考えるほど混乱してくる。それでも綾乃は考え続けた。自分を好きだと言ってくれる貴志のために、言いにくいことを辛い思いをしてまでいってくれた里美のために、そして何より自分自身のために。

結局ゆうべは一睡もできなかった。それでも綾乃は、とてもすがすがしい気持ちだった。悩んで悩んで悩みまくった綾乃は、あるひとつの決心をしたのだ。

大学に着くと、綾乃はすぐに食堂に向かった。昨日あんなことがあったけど、きっと里美はいつもの席にいと、綾乃は確信していた。

食堂に入ると、やはり里美はいつもの席にいた。心なしか不安そうに見える。綾乃は里美の好きなヨーグルトを買って席に行き、元気よく「おはよ！」と声を掛けた。里美は綾乃を見て一瞬驚き、ほっとしたように「遅～い！」と言って笑った。



駅前にある、少し前にできたカフェは、お昼どきということもあってかなり混雑していた。その中をキョロキョロしながら貴志が歩いてくる。綾乃が手を上げると貴志はすぐに気付き、テーブルまでやってきた。

「なんか久しぶりだよね」

貴志に告白されてから、まだたったの1週間しかたっていなかったが、その間会うことはもちろん、電話すらしていなかった。

久しぶりに会う貴志は相変わらずいい男で、優しい笑顔だった。

しばらく黙っていたが、綾乃は軽く息を吸い込んで話しだした。

「この前はひどいこと言ってごめんね。あの時は頭がごちゃごちゃになってて……。あれからね、いろいろ、ほんとにいろいろ考えたの。あたしはずっと哲也のことが好きで、振られたときはほんとに悲しかった。悲しくて辛くて、毎晩泣いた。でもね、いつのまにか、振られたことよりも相手が美人だったってことにこだわるようになってたことに、自分では気付いてなかったの。貴志くんにご告白された後、里美に言われたの。『相手が美人だったことにこだわってる綾乃こそ、外見ばかり気にしてるんじゃないの』って。初めは『そんなことない!』って思ったけど、ほんとにそうだったのよ。ううん、それどころか、自分の中身にすら、ほんとに自信がなかったの。そのことに里美が気付かせてくれた」

貴志は黙って綾乃の言うことに耳を傾けている。

綾乃はさらに続けた。

「里美に言われたとき、『あたしの味方だったはずなのに、なんで?』って思ったけど、ほんとに里美のほうが辛かったんだよね。友達にキツイこと言うのって、すごく勇気があるし、怖いことなのに、それでも里美は言ってくれた。だからこそ、ちゃんとした答えを出さなきゃって思ったの。里美も、そして貴志くんも納得できるような答えをね」

綾乃は言葉を切り、水を飲んで深呼吸をひとつした。

「あたし、貴志くんとは付き合えない。貴志くんとしゃべったり遊んだりしてる時すごく楽しかったし、貴志くんが好きだと言ってくれるなら、付き合うのもいいかと思ったりもした。でもね、今のあたしじゃダメなの。もっと成長して、自分に自信を持てるようになって、それから考えたいの。ワガママかもしれないけど、今、貴志くんと付き合うことはできない」

そこまで一気に言うと、綾乃は貴志の反応を待った。

貴志は何も言わない。ただグラスの氷を見つめている。

怒っているのだろうか。綾乃はどんどん不安になり、ほんの数秒のはずが何十分にも感じられた。自分の出した答えは貴志を傷つけるだけの、単なる自己中心的なものかもしれない。

綾乃がそう思った時、貴志が口を開いた。

「それでこそ綾乃ちゃんだよ」

「え？」

意外な答えに綾乃は驚いた。

「里美がいつも言ってた。綾乃ちゃんは自分に厳しいからよく壁にぶつかるけど、それを頑張っ  
て乗り越えるのが、綾乃ちゃんなんだって。哲也くんのこと、絶対乗り越えられると信じてる  
って言ってたよ」

綾乃は言葉もなく、ただ頷くしかできなかった。里美が自分のことをそんな風に思ってくれているなんて、まったく知らなかった。

「オレもそう思うよ。だから待ってるよ。そりゃさ、ほんとは今すぐにでも付き合いたいと思うけど、逃げとかそういうんじゃないくて、綾乃ちゃんもオレと付き合いたいと思った時にそうしたいからね」

「ありがと。貴志くんにそう言ってもらえると頑張れる気がする」

「でもなるべく早く頼むよ。オレだって結構モテるんだからさ」

貴志はそう言って笑った。綾乃も一緒になって笑いながら、里美と貴志に心から感謝した。



あれから1年。4年生になった綾乃は、就職活動と卒業論文で忙しい毎日を過ごしている。今日も綾乃はリクルートスーツを着て面接のハシゴだ。緊張もするし、不安もある。しかし綾乃は生き生きとしていた。

「ごめん、待った？ なかなか連絡こなくて……」

息せききって店に飛び込んできた綾乃は、店の主人に「とりあえずビールね」と声を掛けて席に着いた。

この店は3人がいつも利用する店だ。とても小さいが、料理はおいしく、フトコロにも優しい。おまけに店の主人は気さくな人で、3人とも兄貴のように慕っている。

「ううん、大丈夫。で？ どうだったの、結果は？」

里美が不安と期待の入り混じった表情で聞く。

「それが……」

綾乃が目を伏せると、その場の空気が少しピリッとした。綾乃は一瞬間を置いて、

「見事、内定ゲット！」

とピースサインを作ってみせた。

「なんだよ～！ オレ、どうやってなぐさめようかと思っちゃったよ」

貴志がほっとした顔で笑う。

「でもほんとはよかった。綾乃が1番行きたかったところだもんね。私まで今日1日ドキドキしてたもん。おめでとう！」

「ありがと。あたしもほっとした。今までにもいくつか内定もらったけど、やっぱり1番嬉しい」

「これでやっと、ゆっくり寝られるって感じだよな。オレも決まるまでは、夢に面接のシーンが出てきておちおち寝られやしなかったよ」

綾乃と里美も、そうそうと笑いながら頷く。

「ね、ね。それじゃあ乾杯しようよ」

里美はジョッキを持ち上げ、貴志もそれに続いたが、綾乃はそれを止めた。

「ちょっと待って。もうひとつ、大切な話があるの。それが終わってから乾杯しよう」

「大切な話って？」

里美も貴志も不思議そうだ。

「あたしね、1年前、すごく傷ついて悩んであの時は辛かったけど、今はあのことがあってよかったって思ってるの。自分に自信を持つって、簡単なようでもすごく難しいけど、自分の最大の味方って、結局は自分なんだよね。誰がどう味方してくれても、自分で自分の味方ができなければ、何の意味もない。それに気付かせてくれたのは里美と貴志くんなの。本当に感謝してる。ありがとう」

綾乃が真面目に頭を下げるので、里美と貴志は少し照れくさそうだ。

「自分に自信を持つために、自分の好きなことを突き詰めてみようって思って頑張ってきた。そしてその道を極めるために、就職活動も頑張った。もちろん内定をもらっても、それはまだゴールではなくて、単にスタートラインに立っただけなんだけど、スタートを切る前にどうしても2人にお礼が言いたかったの。それともうひとつ……」

と、綾乃は貴志のほうを向き、

「貴志くん、あたしと付き合ってください」

貴志は目を丸くして綾乃を見つめている。綾乃はしっかりと貴志を見ながら話した。

「もしこの内定をとれたら、スタートラインに立てたら、貴志くんと言おうって決めてたの。貴志くんは、あの後も変わらない優しさであたしを支え続けてくれた。あたしはどんどん貴志くんのことが好きになってったの。あの頃も好きではあったけど、今はその『好き』とは確実に違う『好き』になってる。だから、今度は自分から言おうって。もちろん貴志くんの気持ちが変わってなければの話だけど」

貴志もしっかりと綾乃を見て、真面目な顔で言った。

「オレの気持ちは、あの頃とは変わったよ」

「そっか……。1年も待たせちゃったもんね。しょうがないか」

綾乃はショックだったが、笑顔を作って明るく言った。すると貴志はニヤッと笑って言った。

「違うよ。もっと好きになったんだ。オレもそろそろ2回目のアプローチをしようと思ってたところなんだ」

「何だ～、もうびっくりしちゃったじゃない」

「さっきのお返しだよ」

貴志と綾乃が笑いながら里美を見ると、里美は泣いていた。綾乃がびっくりして

「里美、どうしたの？　なんで泣いてんの？」

と言うと、里美は

「だって私、嬉しいんだもん」

と、涙で顔をグシャグシャにしながら笑った。綾乃もつられて涙ぐんでいると、店の主人が「はいよ。これ、オレからのお祝い。乾杯すんだろ？」

と、ジョッキを3つ持ってきた。

「おっ、サンキュ。さすが、気が利くね～」

貴志が茶化すと、店の主人は貴志の頭を軽く小突いて笑いながら戻っていった。

「里美、涙ふいて。乾杯するよ」

綾乃は笑ってジョッキを構え、貴志も、そして涙をふいた笑顔の里美もジョッキを手にした。

「綾乃の内定ゲットに」

貴志が言う。

「貴志と綾乃のこれからに」

里美が言う。

「あたしたちの永遠の友情に」

綾乃が言う。

3人は未来に向かって、高く高くジョッキを持ち上げた。

「乾杯！」

(完 結)

## 卒業

<http://p.booklog.jp/book/42684>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42684>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42684>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.